素顔の神学生　在学生座談会

司会

教授　大住雄一

小松美樹（こまつ　みき）
2015年度学部3年

牧師家庭で育つ。交通事故から高校通学が困難となる。無理のない非常勤をしながら献身を志し2013年に学部１年に入学。

内田光生（うちだ　みつお）
2015年度学部３年

大学卒業後、私立小学校の教員となる。悩んだ末、召命を受け牧師を志す。

李振一（い　じんいる）
2015年度学部４年

1993年韓国で受洗。2003年来日。日本の大学卒業後5年間社会人経験。2014年献身を志し 3年次編入学。

渡邊典子（わたなべ　のりこ）
2015年度大学院博士課程前期課程1年

大学卒業、就職、結婚、専業主婦、兼業主婦（召命受けるも時を待つ）、退社後1年を経て編入学。

大住：きょうは、ただの神学生ではない人たちに、集まっていただいています。

小松：家族特集ということですか。

大住：そう。これで大学案内を作ります。

小松：それじゃあ、あまり苦労話はできないですね。

大住：いや、こういうことでも支えられて、なんとか神学校生活をできているということを話していただければ。

小松：入学試験を受けようとした時には、結婚して、出産が予想されていたので、これは試されているのかなと思いました。でも予定日が見事に夏休み中だったので、これはみ心かなと。

大住：李さんは、ここに来るまでに物語があるのですよね。

李：私の場合は、妻が先に献身していました。10年前に結婚した時、妻はすでに神学生で、私も日本の大学に留学していました。両方とも学生結婚をしたわけです。妻が私をこの神学大学に導きました。その間、行くか行かないか、迷った時期もありますが、妻の支えと後押しで、それを真剣に受け入れて、今ここにいます。

内田：私の場合は、相当特殊です。学校に長く勤めましたが、55歳になると早期退職できるのです。ところがその前に病気をし、53歳の時に病気が治っても、もう同じ職場に戻らないことにしました。その時に献身を示されました。キリスト者でない妻は「55歳まで待ったらどうか」と言っていたのですが、入学してしまうと、献身を認めてくれました。「ちゃんと卒業して」と言うだけで協力的です。入学してからずっと朝祈っています。そのことを彼女には分らないので、彼女のためと教会の人たちのための祈りをノートに書くようにしています。もう6冊になりました。 1冊終わった時に彼女に見せて、「洗礼を受けないかなぁ」と話したのですが、そこはなかなかうまくいきません。朝、学生寮でも5時に起きて 1時間ぐらい祈りのノートを作っています。

大住：奥様は今どこにお住まいですか。

内田：横浜です。

小松：学校が始まった頃、奥さんがみんなのためにおにぎりを作って持ってきてくださいました。神学校というものにマイナスイメージがないのなら、時々遊びに来てくださるといいなぁと思いました。

内田：教会でも、おにぎりをみなさんのために作ってくれることはよくあります。運動会の時に「行こうか?」と聞いてくれたのですが、「来なくてよい」と答えました。

大住：何?内田さんの方が断っちゃったの?

渡邊：心はもうこちらに向いていて、あとは神様がどう押してくださるかですね。

私は、入学する8年ほど前から召命を与えられていました。けれども自分は仕事をしていましたし、家族もあるし、娘もまだ手のかかる頃で、「召命と言っても勘違いかもしれないな、時を待っていよう」と思っていました。その後職場にいざこざがあって、私はその職場を辞めました。これこそが召命に応える準備なのかなと思って、一年アルバイトをしながら家族に話し、牧師に話し、家族も教会も納得して理解してくれました。でも、召命に応えるということがどういうものなのか、家族には想像できていなかったと思います。今、神学生として3年目ですが、現状を見ながら、こういうことだったのかと思っているかもしれません。実家の両親が老老介護の状態なので毎週一回通っています。当時は一人暮らしの叔母も大丈夫で、同居の父もまあまあ畑仕事をしたりしていたのですが、一年ぐらい前から状況が変わってきて、老老介護の実家の母が弱ってきて、父も弱り、一人暮らしの叔母も病気をしたりして、そちらにも関わることとなりました。同居の父には病気が発見されましたが、入院を嫌がるので、毎週病院に付き添っています。大学に来るのにもふうふうして、帰りに買い物をして家事をして、ひいひいしています。もともと勉強の時間をあまり取れなかったのが、今年に入って、自分でもよくやっているなと思うほど、家事をしながら何とかかんとか勉強しています。キッチンに勉強道具を置いて。この前、来週必要なテキストが見当たらなくなって探していたら、空いているお鍋の中に入っていました。修士課程になってから勉強が難しくなって、発表が多かったり、突き詰めて考えなければならないものが多かったりで。けれども、何とか、ごまかしごまかしやっています。本当はもっと掘り下げた勉強をしたいけれども、このような環境も与えられたものでしょうし、もしかしたら中断するかもしれないと覚悟したこともありますが、「中断したとしても続けよう」という思いを与えられて、学校の仲間や教会の方々のお祈りもあって、「支えられているんだなぁ」「主が導いてくださっているんだなぁ」と思いながら学校に来ています。

大住：小松さんはどうだったのですか。

小松：妊娠５ヶ月の時に入学試験で、それまではつわりもあって、「これで入試の面接に行けるのかなぁ」という不安はありました。でも試験の時にはつわりも治まって、「安心して入っていけるな」という感じでした。もともと結婚前から夫には「神学校に行きたい」と言っていました。昔から体調にも問題があって、学校には入れないなと思いつつ、「いつかは」「許されるなら献身したい」と思っていました。今年は、と決意して役員会も通った頃にお腹に子どもが与えられたと分って、でも家族をはじめ周りにも神学校に行くことに反対する人はいませんでした。あとは神様に問うしかないと思って。家では、勉強はほとんどできません。ここでは子どもに専念し、ここは勉強に専念するというように、生活に区切りをつけています。

大住：お子様は、普段はお母様が面倒をみてくださるのですか。

小松：近所に個人の家庭で保育をしてくださる方があって、そこでみていただいています。でも、朝一番早い授業の時や夕方遅い授業の時は、母に送り迎えをしてもらっています。でも、働いているお母さんは皆、そうなのだなと知りました。そうすると、限られた時に子どもと一所懸命向き合うしかありません。この大学は、そういう家族も受け入れてくれる所です。子どもを連れて学校に来てもよいし、遊びに来てもよいし。

大住：制度としては、子どもの面倒を見ることはできないのですが、周りの学生や事務の人たちが、子どもを歓迎してくれますね。内田さんは、卒業してからのことは考えておられますか。

内田：私は、地方の無牧の教会に派遣されたいと願っています。横浜に家がありますので、妻はそこを守らなければなりません。だから、私は単身で行くつもりです。私自身、あと長くても20年しかできません。中３の男の子がいますが、今も母親と二人で仲良くやっていますし、娘は一人で生活していますし。

大住：李さんのお子さんは?

李：６歳４歳３歳の三人の男の子がいます。子どものための時間もあまり取れませんが、子育ても妻と二人でしていて、他の人の力を借りることもできません。大学から帰って家事の手伝いをして、机につくのが夜の10時。それから眠くなるまで、次の日の準備や課題をします。限られた時間でも神学に触れることができるのが恵みです。妻が先に神学生になりました。私もキリスト者で、二人とも神に仕える生活でしたが、私は「伝道者として献身するのは私の道ではない」と思っていました。しかし、妻の献身の志を守る姿を見て、自分も献身しようと思いました。神の導きに違いないのですが、妻を用いて

私を導いてくださったと思います。そのご計画に感謝しています。折角与えられた道ですから、子どもたちと一緒の時も、一緒にみ言葉に生かされたいと思います。子どもは「神学校に出かけないでくれ」と言いますが、同時に「行くなら一緒に連れて行ってくれ」と言います。家族一丸となって、全員が神様に仕えるという姿勢です。

大住：李さん自身、別の研究の志をもって、日本から更に他の国に留学するつもりであったのに、献身したわけですね。夫婦で綱引きをして、負けたというか、妻に負けたと言えますか。

李：そうですね。大きな葛藤もありました。そのことで悩んでいた時に「まず神の国と神の義を求めなさい」というみ言葉を示されて、このみ言葉に立っていた妻が勝ったと思います。ついて行くしかありませんでした。

大住：小松さん、お相手は大丈夫ですか。

小松：そうなんですよね。夫だけ置いてけ堀にならないかなと思うことはありますが、入学する時から支えてくれていますし、娘と教会に行くことも楽しんでいます。また、「家族も巻き込んで、東神大の学びも教会生活も送ってほしい」と話してくれています。

大住：きょうは皆さん、ありがとうございます。